
ウィスキーボンボン

柊 雪華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィスキーボンボン

【Nコード】

N6530S

【作者名】

柊 雪華

【あらすじ】

高校時代のバレンタインデーの思い出。何も知らない幼い日々のこと。

全てを知ってしまった今ではそれすらも悲しい思い出。

年齢制限をかけるほどではないですが多少性的な描写があります。

ご注意ください。

「ところでひなたちゃん是谁かにあげる予定あるの？」

もはや生徒会室とは名ばかりの、生徒会事務局員の溜まり場と化した部屋。

日めくりカレンダーは2月13日になっていて、その端的な発言を解析してくれている。

つまり、先輩が言いたいのはこういうことだ。

「明日バレンタインデーなんだけど、誰かにチョコレートあげる予定ないの？」

この部屋に出入りするようになって10ヶ月にもなるう。生徒会はこのころの人間ばかりだとわかってはいるのだけれど、まだ完全にはメンバーの強烈な個性についていけない。先輩に言わせれば、私は生徒会唯一の常識人、だそうだ。

でも、私以外にもう一人いるのだ。それも、私以上の超常識人が。

「明日の話ですか？」

静かな声で、でも楽しそうに話に乗ってくる、眼鏡をかけた白衣の男の人。どこからどう見ても生徒ではないこの人こそ生徒会最大の常識人、藤沢知。生徒会顧問で、妹のクラスの担任だ。

妹、といっても後輩ではない。双子の妹なのだ。その名前も「ひなせ」で、私たち姉妹が二人でいるとどちらがどちらだかわからなくなる人ばかり。

実は藤沢先生もその一人で、4月のはじめ、入学したばかりの頃にひなせと間違えられたことがあった。それがなかったらおそらくこうして生徒会室に出入りすることにはなっていなかっただろうし、

私が今こうして悩むこともなかっただろう。

大変ありがちなことに、私はあの瞬間から彼に「興味を抱いてしまふ」ことになったのだから。

恋、とかそういうものとは違うと思う。自分でもよくわからないのだ。ただ、なんだか心のどこかにひっかかるものがある。それだけの話。だから、誰かに話す理由もない。ただ心の中に四六時中晴れない霧がかかっているだけ。

「あ、先生はもう予定あるのー？」

「ありませんよ、くれるような人もいませんからね」

「えーっ、先生かわいそー」

「からかわないでくださいよ。ほら、話し合いですよね、今日の生徒総会の反省」

ほら、どこまでも常識人。おちよくって回る先輩を軽くかわして本題を出す。

「あーはいはい、そうでしたね」

うだうだと購買で買ってきた菓子パンを口にする先輩を促し、席につかせ、職員室で印刷してきたプリント数枚を配っていく。

「じゃあ議長。お願いしますよ」

そう言っ、先生は指定席である窓際のパイプ椅子に足を組んで座る。私たちの会議の内容を全然聞いていないように見えるけど、実はちゃんと聞いているらしい。この人にかかると本当に油断も隙もあつたものではない。

これって周りの男子生徒にはまったく見られない魅力なんじゃないかろうか、と思う。もちろんそんなことはおくびにも出さないけれど。

会議も早く終わってしまったので、また先輩たちはくつろぎタイムだ。私もさつき変な質問をしてきた先輩から、菓子パンを半分分けてもらう。大変タイミングの悪いことにそれはチョココルネで、否が応でも明日のことを思い出させてくれる。

「で？ひなたちゃん。結局どうなの？」

「どうなの、って言われてもですねえ……」

本当に、困るのだ。先生に手作りのチョコレートをあげたなら、どんな顔をされるんだろうか。そうは思うけど別に試そうとまでは思わないし。それにそんなことは、私がしなくてもひなせが勝手にしてくれるだろうし。

「じゃあ先生は？先生確か甘党だったよね？」

そこで先生に振らないで、と思いながらも、やっぱりなんだか先生の反応が気になってしまふ。結局先生の言葉を一つたりとも聞き逃さぬように、いつもより耳に神経を集中させている私がそこにはいた。情けない。

「ええ、でもただ甘いだけだったらダメなんですよ。ウイスキーボンボンなんてたまらないですね」

「先生おっさんくさーい！」

「ホントに20代なんスか？」

数人から異口同音にそんな声上がる。確かに、私たち高校生からするとウイスキーボンボンは大人の味という感じだ。でも、おっさんくさい、はいくらなんでも……。

「ええ、これでも院出て2年目のピチピチですから」

言ってることは文系なクセに教えているのは物理。そんな藤沢先生はとても有名な国立大学の物理学科にいたという。私もそこを目指してはいるのだけれど、両親を亡くしてひなせと二人暮らしの身としては、早く社会に出て生活を支えなければいけないのか、とも思う。たとえ、両親が莫大な財産を残して逝った、としてもだ。

「でも院卒ならピチピチって年じゃないっスよー俺らからすると」「本当に君たちは……失礼なことばかり言いますね。遠野さんを見習ってあげてくださいよ」

突然先生に話を振られ、思わずぐいっと顔を上げてしまふ。目が合う。

「ね？遠野さん。あなたは僕に暴言吐いたりしませんよね」

恋人に囁くかのような、今食べているチョココルネ以上に甘い口調に、一瞬胸がぎゅっとなる感覚を覚える。でも違う。これは恋じゃない。先生は私をからかっているだけなんだ。

「でも先生、せめてブランデーたっぷりの生チョコの方が生徒受けはいいんじゃないですか？」

ならば私も先生をからかってやろう。幼い私が至った結論、そして、精一杯の暴言だった。

そしてそれから月日は流れ、高校卒業と同時に先生が私たち姉妹の家に住むことになった。

ちよつとここには複雑な事情があるのだけれど、私の口からはまだ語ることはできない。語るたびに傷つくことになるから。そういう、かなしくてやるせない事情があるのだ。

「で、ひなた。今日、何日でしたっけ」

「2月12日、だけど……何かしたの、知？」

けれど、「こうして」いる間は、そんな悲しい現実から目を逸らす事ができる。逃避でしかないけれど、もう私たちにはそれしか道が残されていなかったのだ。

「ブランデーたっぷりの生チョコ、作ってくださいますよね？」

「それ、私が高校生のときの話なのに。まだ根に持ってるの？」

「いいえ、根に持ってるわけじゃないんですよ。それとも今の僕たちの年齢なら、やっぱりウィスキーボンボンですかね」

そうかもしれない。先生、いや、知はもうすぐ三十路に手の届くような歳だ。ウィスキーボンボンのほうが似合うかもしれない。うん、それよりももっと似合うものがあるはず……。

「駄目。生チョコもウィスキーボンボンも駄目」

「え、いいじゃないですか。僕が甘党なのはひなたもよく知っているでしょう」

「知ってるけど……その」

口ごもる私に、知はニヤリとして、少し乱暴に私を抱き寄せる。

「何ですか。チョコよりも私を、ってところですか？」

「変態。通報するから」

16歳のときよりも口は達者になったけれど、私はあのとときと本質的には何も変わらないのだ。

いつまでたっても、知に対しては素直になれないあたりが。

「だったら、バレンタインデー前倒しにしちゃっていいですかね」

「え、どういう……っ」

息が詰まる。何度も何度もそうされてきたはずなのに、すっかり馴らされたはずなのに、また私の心と身体の何かが不自然な放物線を描くようにのぼりつめていく。

「あ、前倒ししてもいいみたいですよ、”こっち”は」

ものすごく恥ずかしいセリフを涼しい顔で言つてのけられると、あとはもう知のなすがまま。

この人は本当にこずるくて、歳の割に生意気で、口が減らない。反抗したくなる。暴言を吐きたくなる。けれど、毎晩のようにこんなことをしていれば、身体の方が先に知の言うことを聞くようになってしまふのだ。

やっぱり私は情けない、でも、これにはあらがえない。私と知、そしてひなせが背負った重すぎる罪。それを忘れるにはこれしか手段がないのだ。自我も理性も何もかも消し去ってしまうには、これしか手段がないのだ。

罪の子は罪の子。こんな私たちでも、ヴァレンチノ司祭は、救いの手を差し伸べてくださるのですか？

（後書き）

遅くなっただけ但レンタインデー（？）な短編でございます。

元ネタはとってもここには載せられないような小説。

ノクターンの方で書こうかなあ……。

調べたところバレンタインデーのもとなった司祭はバレンチノ司祭だそうです。

イタリア語でバレンチノ。読み方かえればバレンタイン。なるほど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530s/>

ウィスキーボンボン

2011年4月22日17時40分発行